

振り仮名表現の諸相

内山和也

(2000年9月30日受理)

A variety of "FURIGANA"

Kazuya Uchiyama

"FURIGANA" is an important element in a Japanese writing system. This article considers various kind of "FURIGANA" in modern Japanese notation comprehensively.

Key words: FURIGANA, text by KANJI(Chinese characters) and KANA letters

キーワード：振り仮名，漢字仮名交じり文

0. はじめに

日本語の表記体系の特徴の一つに「振り仮名」¹⁾がある。歴史的には、振り仮名が日本語表記を可能にした側面が指摘できる。振り仮名は、漢文訓読の作業の中で生まれたものとされるが、山城(1993)が指摘しているように、漢文訓読は解説にとどまらず日本語を表記するための方法となる。由良(1973a:16)は「音訓混交主義、ルビ主義が、異質言語の自国語に引きつけた読解力の源泉となるだけでなく、それをもとにした創作へのエネルギーになる」とのべ、訓読とルビとが日本語表記の要諦であるとしている。また、紀田も「ふりがなはなるべく使わず、ふりがなの不要なやさしいことばで読み書きを行うーというのが戦後の国語政策の流れだが、そもそも日本語はふりがながなくては通用しない言語ではないだろうか」と述べ²⁾、その歴史的重要性を指摘している。

使用量や使用範囲に一定の変動があるものの、振り仮名は現代にもその命脈を保っている。新聞での使用実態を調べてみると、新聞1紙当たりの平均数が、1998年で46.86(1500/32)、2000年で67.19(2150/32)となっている³⁾。また、用例の約8割が漢字のよみを示す振り仮名であった。古い時代の表記の工夫である振り仮名が現代にまで生きる「生命力」を、浅田(1997)は「創造性」によって説明しようとしている。使用上の規範的制約がなく、自由に施しうることが振り仮名に生命力を与えているという意見である。確かに、振り仮名という形式には相当の柔軟性があり、その用途

を当初のものから大きく拡大しているといえる。しかし、我々が日常的に接する用例の大半が「読み仮名」であることを考えると、振り仮名を「必要悪と称すべきものであり、日本語のさまざまな特徴と問題点を集中的に体现している(泉1993:103)」と見る方が実情に合っているとも思われる。

また、多くのテキストが電子的に実現される状況を考えるときに、振り仮名をどのように理解し、説明すべきかという問題が生じる。坂井(1968:195)は、コンピュータの普及が言語表現を変えると予言し、「コンピュータを動作させる言語と人間の自然言語との間で相互の接近が考えられる」と述べている。現在、入力での形式言語の直接使用は少ないが、コンピュータに関連する多くの新語や表現が使用されているという意味では「インターネット、電子メール、ニュースグループもまたそれら自体が世界の語彙に大きな影響を与えている(フィッシャー2001:292)」といえる⁴⁾。表記の面でも、ディスプレイと紙との間の接近によって⁵⁾、変化が生じると考えられる。

本稿は、以上の点をふまえながら、振り仮名を文体的観点から⁶⁾包括的に論じてゆく。

1. 振り仮名の比喩性について

振り仮名は、〈文字〉と〈文字〉との関係と見ることが出来る。このことには、ふたつの意味がありうる。

まず、振り仮名の大半は漢字と仮名との関係であり、その「表語絵文字」と「表音節文字」との関係が、疑

似的に文字と音声との関係（共感覚性）であるように見られることから、デジタル環境において〈視覚〉と〈聴覚〉との直接的な関係（マルチメディア化）に進んでゆく可能性（拙論1999参照）⁷⁾が考えられる（視覚と聴覚との関係については、後に改めて議論する）。

同時に、文字と文字との関係であるからには、テキストや表記に独自の機能を担っていると考えるのが自然である。木坂（1976：390）は、振り仮名が「言語音の一次元的、単線的展開に対して二次元的、複線的構造を文章に持ち込み、言語の意味だけでなく、発話の意味（場面や情感の内実）に代わりうるものを加えようとする」と述べ、言文一致文の確立に重要な役回りを演じたとしている。但、振り仮名が「複線構造の表記様式」であるのは間違いのないにしても、複線的性格が本質的に言語表現一般の特徴であることは注意されなければならない。Clark & Fox Tree（2002）は、会話が2つの平行なトラック（本来のメッセージと表現プランの自己調整のための付帯的メッセージ）から成り立ち、書き手が挿入・並置・修正・随伴などの手法を用いてそれらを単一の行動の流れに合併するものであると提案している。言語伝達がメッセージの流れとメッセージの流れに対する書き手の即時的反応とを行動の上に同時に表示する（ことによって表現を一貫性あるものに構造化する）という見解は、西条（1999）にも見られる。「語るものと語られるものに分けて考えるという観点（西条：8）」をとる限り、言語の中にも言語（語られるもの）とメタ言語（語るもの）とが見いだされるのはむしろ自然であり、メタ言語を含んだ表現の流れを書き手において捉えれば、複線的で重層的な表現を単一の行動のうちに表示していることになるのである。そして、〈語られつつあることについて語る行動〉を続ける書き手の行動の一貫性によって構造が生じることになる。従って、振り仮名が書記言語に独自の表現性を付与するのは疑えないとしても、単線-複線という対比を過大視することはできない。振り仮名が口頭語にない表現性を持つのは、それが可視的な複線構造だからである。

拙論（1996）では、表記面における振り仮名の機能を、テキストの外形である複数の系列間に〈結び目〉を作る機能であると論じた。言い換えれば、仮名だけで書かれたテキストの系列と漢字仮名交じり文の系列との絡み合った関係と理解するということである（論文末図参照）⁸⁾。これは、本来的な仮名文字の系列を副次的と見做される位置にずらし、本来の位置に漢字を入れ込む操作に関わっている。日本語の表記体系において、漢字は、歴史的にも共時的にもすべて宛字である。アンガー（2001：29-32）が指摘している通り、

漢字は仮名の臨時の〈代用〉であり、非本来的である⁹⁾（その点で漢字仮名交じり文は潜在的に複線構造と言える）。しかし、一方で、われわれは、漢字に仮名が並列しているとき、仮名を補助的であると見る。これは、振り仮名の受容に一定の「方向性」のあることを示している。拙論（1999a：233-234）では、振り仮名の果たす機能の類型化の基準として〈参照の方向〉を用いた。また、先行研究でも、振り仮名と本文のいずれが主たる機能を果たすかが論じられている（進藤1982、岩淵1988、細川1989など）。受容に方向性があることは、情報の強度（信頼度）に格差があることを意味する。卑近な例を出せば、〈^{左を見よ}→〉という張り紙があるとき、われわれは矢印の指示する方向に従いがちである。情報の強度は、行動上のコストによって計られる¹⁰⁾と見られ、その意味で、振り仮名に漢字の「読み」を示す用例の最も多いことは自然であろう。

また、参照の方向について考えるときには、絵と文との間に矛盾が存しないことに注意すべきだろう。矛盾は、言表の中・間にしかない（フーコー1986：18、49）といえる。絵と文の間には、対応の誤りがあっても矛盾は生じない。振り仮名はコトバとコトバとの関係であるから、常に矛盾を生じることができる。真実、一時的など、作例は示せるが、実際の用例が多いとはいいがたい。むしろ、振り仮名は、コトバの間の関係を、絵とことばとの対応関係（ここで形・音・義をもつとされる漢字の性質が利用される。読みの不明な・不明であると前提された漢字は、音を欠いているわけでないが、仮名が並列することによって音を欠いた単なる形象と見做される）である「説明文」の形式に同化する¹¹⁾。但、そうであれば、コトバは小書きの仮名の方にあることになり¹²⁾、漢字が「本文」であることが名称の上で矛盾する（「本文は『文』でない」）だろう。このとき、コトバとコトバとの関係であるが故に生じうる矛盾が名称の上にならざれば、循環しえない等価な対応に裁ち直されることで、〈参照の方向〉がつくりだされる。また、ひとたび〈参照の方向〉と意味上の等価性が確立されると、垂直・水平軸からずらされた表記形式が名称上の矛盾を覆い隠す。矛盾が名称の上にならざれば見えにくいものの、表記のずれは一目瞭然だからである。

覆い隠された矛盾は、ふたつの錯誤にわれわれを導く。まず、テキスト全体の二次元的構成から系統的に逸脱していることが、仮名系列を副次的文字列と見せ、本来全く必然的でない漢字が、日本語表記の中心に位置づけられることになるのである。また、日本語の漢字が、振り仮名に頼ることなく、つまり形と義との関係のみで書くことが出来ているのだと考えることは、

語が連なって文になるという理解を容易に生み出す。形が義と直結しているのなら、語どころか一字一字、一筆一筆が意味に満ちたものとしてたちあがり始めるからである。そして、このことが漢字を意味の極めて濃密な存在となす。しかし、いかなる書き言葉であれ、話し言葉よりはるかに整っているということは、語の集積でなく、〈文〉を書いているということの意味する¹³⁾。〈文〉が原理的に反復可能である限り、仮にそれが連続的な手続きで産出されるのだとしても、何らかの不連続な単位に分節されることは明らかである。しかし、それは、不連続なものの連続が文を構成するという意味でない¹⁴⁾。換言すれば、文字や語によって文を書くのではなく、それらはほぼ同時に書かれると考えるべきなのである。しかれば、振り仮名は、文の中の〈語〉と呼ばれる範囲に生じているのではあっても、語という自己充足的な単位に付属している¹⁵⁾のではないはずである。すでに述べたように、振り仮名は、「複数系列間の関係」と見られるべきである。

以上のことから、最も基本的な振り仮名の機能と見做される「読み仮名」は、表現論上の問題としてしばしばとりあげられる〈独創的な用法〉に対する零度^{ゼロ}というわけでなく、むしろその方が修辭的な視覚上の比喩¹⁶⁾なのだといわなければならないだろう。

2. 振り仮名の媒体性について

振り仮名の使用実態は、テキストジャンルにおいて一定の違いが見られる(京極 1981, 拙論 1999b: 22-25)。一般的に言えば、振り仮名は、テキストがいかなるテキストであり、いかなる参加者に開かれるものであるか標識する表現のレベルの選択だといえる。出版物が、総ルビ・パラルビ・ルビなしのいずれを選択するか、パラルビの場合に何を振り仮名とするかは、ひきつける読み手を選別する(小野瀬 1999は、読み手の能力との間の好ましい選択を実証的に調査している)¹⁷⁾。

また、振り仮名は、本質的に相互参照の形式であり、何かと何かとを結びつける働きがある。時にそれは、特定の読者を集団に結びつけるものでありうる。これは、メタファーが二つの概念を結びつけると同時に、自己と他者とを結びつける働きを持っていること(坂部 1989: 145)と似ている。

短歌では、様々な種類の振り仮名が豊富に用いられる。高島(2002: 32)は、「残る生^いを快適に過ごす」のような用法を、それぞれの文字列を歌の外形と内実とに任務分担させたものとする。この例は、音数律を維持するねらいが明らかなのではあるが、武部(1979: 482)が「二重表記は、音声化の際の音節数を重んじ

る詩歌の場合に、特に効果的な表現法となった」と指摘しているように、短歌に用いられた振り仮名は多かれ少なかれ同時に音数を維持する技巧となっている。但、進藤(1982: 232)は、「詩はリズムを尊重するからどちら側(本文かふりがな)を読み下すべきかは特に表現上の工夫のあるところであり、またその点において受け手をも規制する力が強いと考える(現代の和歌俳句などにもしばしば見られる)」と述べており、音数を維持するための技巧は、それが朗誦されるものであることを考えるときに、すべてが万人に受け容れられるものではない。振り仮名が、音数の規範の中で読むように強いるものであっても、当然、受け手はそれを拒否することができるのである¹⁸⁾。にもかかわらず、短歌の中で多くの振り仮名が通用していることには、事情があると見なければならない。短歌というジャンルの特徴は、テキストに参加するほぼ全員が、実体的な書き手兼読み手であるようなサークルを形成している点にあるが、畢竟、振り仮名は、それを貴重な技巧と見なすことができる読み手にテキストを開くことで、場を共有する上演形態の形成に参加しているといえよう。モリス(1960: 138)の術語を用いれば、振り仮名は伝達^{トランスミッション}の手段であると同時に、共有化^{コミュニケーション}の手段なのである。

このような振り仮名の用法は、解釈のスキームの伝達が言語行為となる例といえる。同様の運用は接続助詞の用法などにも見いだせる。接続助詞「から」には「理由を表す」用法と「理由を表さない」用法とが認められる。永田(2000)によれば、「から」の本質は、前件から読み手が得る想定に条件文の形式をとる文脈上の制約を課すことであり、限定された想定が後件の発語内行為と比定される時に「理由を表す」用法、後件の発語内効力の構成要素と比定される時「理由を表さない」用法となるという(いずれの解釈を許すかは様々な点からアドホックに選択される)。例えば、「明日返すから5000円貸してくれ」では、〈明日返せば支障がない〉という想定が、誠実性条件にマッチされることによって〈依頼〉をより良く遂行するのである。しかし、ここで「明日返すから5000円貸してくれ」という発語行為が、「返す」に卓立^{トリス}がある場合と「から」にある場合とで、印象に違いを生じることに気づく。これは、前者の焦点^{フォーカス}が条件に関する具体的内容であるのに対し、後者の焦点が発話行為であり、前述した解釈のスキーム自体をメッセージとして構成するからだと考えられるのである。

メディアはメッセージだという警句(マクルーハン 1987: 7)は、マルチメディアの出現によって単体的メディアという概念が意味を失いつつあるときにも、

内容だけを問題にする議論が表層的で皮相であることを教えている。形式は内容の乗り物^{メッセジ}なのでなく、内容を産み出す機構^{メカニスム}として働く一つのシステムなのである。振り仮名や韻律の特徴など、時に周皮的と見做されがちな要素を動員することによって、その〈システム〉に意識をひきつけ、読み手を取りこむよう表現することができるのである。

3. 振り仮名の触覚性について

「触覚」という語が、しばしば「共感覚」そのものを表わしうることが示すように、表現の〈共感覚性〉を考えるとときに殊に問題になるのは触覚である。

しばしば論じられるように、主客の意識を生みだすのは識字^{リテラシー}であり、書くことは〈現実〉と〈記述されたものごと〉とを引きはがす力を持つ¹⁹⁾。また、本質において、文字は言語的であると同時に絵画的であり(デリダ 1978)²⁰⁾、絵画的の性質も現実をしきうつつ非体験的なものと見られうる(しかし、その現実^{リアリティー}は文字の言語的の性質によって生じるのだが²¹⁾)。音声中心主義は、これら二重の意味で、文字を「生きた言語」から退けたと言えよう。振り仮名が視覚的の修辭であるならば、振り仮名は専ら視覚に律された空間(文字的=絵画的空間)で最も良く機能するといえようが、小書きの文字列を体系的にずらす形式が、文字の方塊性ととも透視法的空間を創出するのであれば、直ちに視覚の優位性を浮上させるだろう(文字と空間性に関しては拙論 2002a 参照)。

しかし、ウェブのクリッカブルテキストを一例として、文字は触覚の参与を要請し、絵画的なものから操作的なものへ進化する(この用語は、ウィーナー 1965: 32-33から借用した)。コンドラートフ(1979: 374)の「そのうち『全世界的文字』である『機械文字』が考案されることであろう。それは、どんな人にも、どんな計算機にも理解可能なイデオグラムとなるであろう」という記述は、GUIのアイコンを思わせる。拙論(1999a: 237-238)では、テキスト間に相互参照を設定する機能において、振り仮名とハイリンクとを同種のものを見たが、多くのアイコンはテキスト付であり、同じく振り仮名と同型と見ることができる。但、クリッカブルテキストやアイコンには操作性があるが、振り仮名には触知可能性が欠けている²²⁾。

由良(1973a: 17-18, 1973b: 30-34)は、黄表紙本などの江戸大衆文学が、総ルビと挿し絵との共存によって十全な表現力と大衆への訴求力とを得ていたと指摘している。挿し絵は、絵画と文章との相互参照であり、書籍などの物理的形態上に実現される。従って、挿し

絵は視覚の対象であるだけでなく触覚の対象でもあると考えなければならない。なんとすれば、絵画は鑑賞に際して距離を要求するが、書籍はそれを手にとるよう求めるからである。挿し絵は、視覚に触覚を対置するものであり、振り仮名との共存は、振り仮名に欠在する触覚性(不足する像^{イメージ}でない)を補完することが期待されているのである。

4. 振り仮名の形式性について

振り仮名には視覚と聴覚との関係が含まれているが、発言・会話の書き取り、アナウンス内容の要約などのテロップは、視覚と聴覚との関係化という点で振り仮名と共通する点がある。

塩田(2001: 53-55)は、関与性理論^{レラティブネス}を援用し、テロップを通じて視聴者が「伝達行為全体を刺激として受け取る」ことで「すべての物事を客観的に見、批評的に観察する視点」を獲得できると説き、テロップが「強制的に視界に入ってくるがゆえに、わずらわしさを感じさせる」のは「批評的の視点に達することに失敗した受け手」=単に受け手であること甘んじた者に対してであると述べる。確かにテロップが邪魔に感じられることはあろう。但、テロップによる伝達行為は一度しか失敗しない。失敗とは、読み手が読むこと自体を拒否して作意に対抗することだからである²³⁾。読み手たることを自覚したものは、伝達経路の開閉の主導権を握ろうとするだろう。伝達に参与者間の力関係が関与する以上、読み手は書き手より優位になろうとするが、それは、超越的の観察者と振る舞うよりも、信号を無視することで達成される。

また、「伝達行為全体を刺激として受け取る」というときに、視覚と聴覚との共感覚的図式を考慮せずに済ますことはできない。テロップは、出来事・場面・話しことばを文字において繰り返す²⁴⁾、出来事や風景やテロップがシミュレーションによって繰り返されることでしか存在しないというボードリヤール(1988: 53)の記述に対応する。テロップは、特に口頭性が書記性によって繰り返されることで存在するという事実を、スクリーンの上に映し出していることになろう。例えば、政治家のことは、新聞活字で模倣される前に、テロップで反復されることで〈ことば〉となるのである。声が文字によるシミュレーションの中にのみ存在するというのは、文字を音声の代理(不完全な声)と見做すことでない。電子テキストに馴染んだ我々にとって、そこで従来の意味での音声・文字の二項性の無効になっていることは、容易に見てとれるのである²⁵⁾。文字が必ず朗唱可能であるという点では、文字は音声

の下位秩序と見做され、音声は文字による反復のうちにはしかないのであれば、声は文字の下位秩序と見做しうる。矛盾する秩序が併存し循環するのである。しかし、スクリーンでの文字と音声との物理的同期においては、話すことこそが不完全な書くことであるという秩序が見えてくる。完全な形式性を持つのは書くことだけ(バルト 1987: 153-157) だからである。つまり、テロップがその物理的形式自体を伝達するのだとすれば、声に対する文字の優位性が広告され続けるだろう。テロップは、その形式性において、文字と音声との解体された二項性から文字-中心の再構築を行うもので、換言すれば、スクリーンに〈紙〉の性質を付与するのである。

バルトやデリダらのテキスト理論は、印刷テキストを e-text のように読むことを教える。印刷テキストの本質は、読み手の様々な能動的解釈によって構成されることである。テロップがスクリーンを紙と見せるのなら、視聴者が得る「批評的視点」は、印刷テキストの読み手の視点に他なるまい。しかし、その批評的意識の喚起は限定的である。印刷テキストは、〈紙〉から逃れる理論的術^{すべ}を与えられなければ、世界が書物の中に限られているというメッセージ(文字中心の世界観)を伝えるからである。その必然的帰結として、読み手は線の秩序の中に収容され、主体的に意味を構成することはない。テキスト理論が印刷テキストをすら多声的に見せたのとは逆に、テロップにはひとつの声しかない。テロップがシミュレーションであるなら、それはそれ自体を現実^{リアル}として繰り返す²⁶⁾。つまり、テロップは、それ自体の形式にしか言及せず、且つ、その自己言及的指示が受動的な受け手を共示する形でしか生じないところで、読みの依存的な受容の秩序を再構成するのである。

山城(1999: 66)は、振り仮名が電子環境でも「書くための操作手順として生き残っている」と指摘している。このことは、音声から漢字が意識されていることを示す(山城1999: 67)と見ることもできるが、電子環境ではすべてのデータが文字的に記録・処理される以上、漢字仮名交じり文をローマ字で書いている(アンガー2001: 31)と見ることができる。永原(2002: 102-3)が指摘しているように、ローマ字入力、アルファベットによる平仮名の臨時の〈代用〉であり、発音の実体はもとより、ローマ字のつづり方とも関係がない。ローマ字入力「おはよう」と入力するためには、順に[O・H・A・Y・O・U]と打鍵するが、「おはよう」の発音は[ohayo:]であり、ローマ字は“ohayoo”あるいは“ohayo”のはずである。ローマ字入力、アルファベット仮名併列型の振り仮名であり、識字以

前の音声中心へと回帰しているのではない。音声性が浮上するように思われるのは、触覚性を欠いた振り仮名が音声・文字の二分法的秩序を構成するからであろう。

コンピュータの設計は米国向けであり、多言語処理環境の実現には、符号化(テキストのメモリへの格納)・^{エンコーディング}打鍵(キーボードによるテキスト入力)・^{レンダリング}表現(プリンタやディスプレイへの出力)の方法が確保されなければならない(Becker 1984: 82)。〈ワードプロセッサ〉を開発した動機は、いかにして手書きより早く書くかということだったという(森・八木橋 1989: 106)が、そこで発明された〈かな漢字変換〉は、効率的であるばかりか、日本語の在来の表記システムに非常によく適合する。〈かな漢字変換〉は、振り仮名と深く結びついているのである。〈かな漢字変換〉と組み合わせられる〈ローマ字入力〉は、すでに見たように、常に振り仮名を産出する。そして、可視的現れがゼロであるということでは、サイレントコード²⁷⁾といえ²⁸⁾、〈かな漢字変換〉の符号化を通じて、コードは漢字の重要性のメッセージに複号化されると考えられる。〈かな漢字変換〉が漢字の正確な用字を要求することから、「ワープロを使いこなすには漢字に対する知識がこれまでよりも一層必要である(阿辻 1991: 191)」とされるのもその現れであろう²⁹⁾。

視覚と聴覚との関係から見ると、文字的空間に帰属するという点で、振り仮名とテロップとは近い関係にある。音声は、テロップでは文字の下位秩序としてしか存在しえないように見え、〈かな漢字変換〉では不可視の振り仮名の持つ潜在的〈読み〉としてしか存在していないように思える。両者の共通点は、「音声・文字」という二項的秩序を文字の優位をもって構成するところにあるといえるだろう。言い換えれば、両者は、表現素材に〈紙の性質〉を要求するのである。

5. まとめ

歴史の理論は、多くのことについて様々な情報を提供してくれるが、今日の段階では、コミュニケーションの本質といった問題には無力である。答えは歴史の中にではなく、自然選択^{セレクション}の中にあるのかもしれない。自然に存する複雑なもので自然選択によらないものはない。小林(1977)は、表記が多様性を指向して進化し、認知関・コスト性の低さという合理的基準によって選択されるという見解をしめしている。もちろん、選択という言い方は、そうであり得たものの存在を意味するので、意志的な行為をさすものではない。

本稿では、振り仮名に、テキストの相互参照を可能にしたり・複数のものどもを結びつける機能があるこ

とともに、振り仮名が、漢字仮名交じり文・触覚性の不在・音声と文字との二分法的秩序・表現素材としての紙などに結託していることを論じてきた。振り仮名が、紙の上での漢字仮名交じり文の適応の一部なのであれば、表現環境が変わることで新たな適応が模索されようと考えられよう。

デジタルメディアは、本質的にスクリーンを表現素材とするマルチメディアであり、全体的な共感覚化を指向して触覚の取り込みを計るとともに、文字・音声という二項的秩序を解体する。その結果、振り仮名とデジタルメディアは離反してゆくだろう。紙の上での振り仮名の機能は、複数のものを結びつけたり・テキストの相互参照を可能にするという点では、電子テキストのなかで異なる技術や形式によって果たされる。

冒頭の問いに戻って、振り仮名の〈生命力〉は、それが漢字とともに日本語表記の「必要悪」だからというだけでなく、紙というメディアに特化され・テキストへのアクセス権を制限するところに見出されるというべきだろう。十分に廉価で・扱いやすく・所有可能な表現素材は、使われ続けるはずであり、その中で追及された〈表現性〉が、深く備えつけられ不滅化されているところで、振り仮名は半永久的な生命力を持つ。

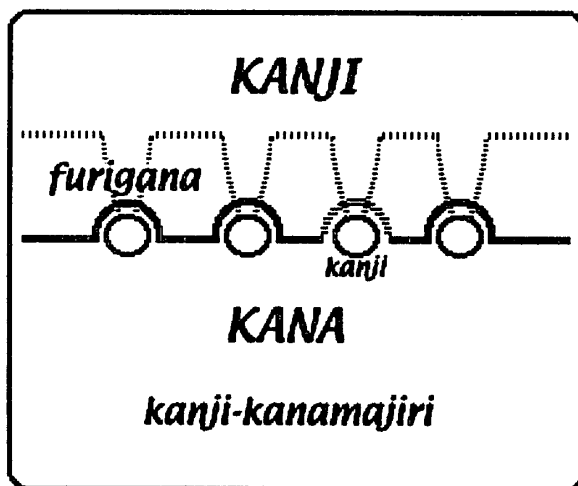
【注】

- 1) 大島 (1989: 63, 1991: 21) は、「振り仮名」という名称が漢字と仮名とを主従関係と見る偏りを持つとし「漢字仮名並列表記形式」という語を提案しているが、本稿では「複数の文字列を併存させ、相互参照を可能にした表記形式を振り仮名という(拙論 1999a: 230)」ものとする。また、玉井 (1932) は「正しきルビの付け方」を明らかにする目的から、「ルビか否かは、その形式と本質との両者より決定するべきである」として、ルビと注釈とを区別しているが、本稿では特に厳密な立場はとらない。
- 2) www.honco.net/japanese/04/page3-j.html
- 3) 毎日・読売・朝日新聞の朝刊(夏季)から単純無作為に32紙分を選び、語レベルでののべ数を調査した。
- 4) Patrick Moorhead は「なじみのない頭文字語や難解なハイテク・ターム」が新技術採用の減速の一因になっているとも述べている (zdnet.com.com/2100-1107-946534.html)。
- 5) 紙に替わる素材として、電子ペーパー(シート状の薄膜ディスプレイ)とリライタブルペーパー(繰り返し使用可能な黒発色する白地の素材)とがある。電子・電光的素材に紙の性質が取り込まれ、紙の中に電子・電光的性質が取り込まれるのである。
- 6) 従って、表記主体が、どのように振り仮名を用いるかという「仮名振り(大島 1989: 61)」の視点は採用しない。新井 (1995: 162-165) は、マクルーハンを援用して「メディア・リテラシーをもつばら『主体の能動的創造による産物』として理解」することが活字的発想であり、「受容スタイルが成熟し、一般化した時」に現れる新たな行動様式や創造性において新しいメディア・リテラシーが形成されると説いている。
- 7) テキストでの音声と文字との併用という点では、DAISY Consortium (www.daisy.org/) が国際規格化を目指す「話す電子本」がある。
- 8) 同様の見解として、鹿島 (1992: 80-81) が、ルビ付き漢文を「ヒエログリフとデモーティックの並記の様に二つの文字言語が並記されていると観た方が適当」で「原語と訳語の別は外観からは判断できない」(対等)と述べている。また、現代語のルビ付き表記は、それが「語翻訳」であることを除けばルビ付き漢文と基本的に同じとしている。
- 9) 現行の表記体系で、全仮名表記が可能で全漢字表記の可能でないことが証拠となる。
- 10) 認知上のコストでない。〈対馬山猫〉の写真に「西表山猫」と説明文があったとして、恐らくコトバを信じ、一々「動物図鑑」で確認する手間はかけない。
- 11) 五十嵐 (1922: 114) は、^{めづから}稀見、^{そのとき}爾来のような振り仮名の用法を「一挙両得策」により「二重以上の意義を兼ね表はす」視覚的修辞法としている。
- 12) 一方、「^{ふしななまのほんじ}全世界征服の野望」「^{このあたり}北岸地峡の地下」のような用法に対しては、漢字が振り仮名に対する説明文であると指摘される(岩淵 1988: 77-9)。ここでは双方向的な参照が可能になっている。
- 13) ひととは、〈文〉を書き〈語〉で話す(パルト 1977: 93-94)。語を不完全な文とでも考えない限り〈語〉の集積は〈語〉に過ぎない。
- 14) 「[言語は]前もって区切られた記号の総体としては現われない…それは不分明なかたまりであって、ただ注意と習慣によってのみ個々の要素を見出すことができる……最初から知覚しうべき実在体を呈示せず、しかもそれらが存在するという、およびそれらの営みが言語を構成することは疑う余地がない、という奇妙な・おどろくべき特質を示す(ソシュール 1972: 146-150)」。
- 15) 振り仮名を語の問題であると見るとき「振り仮名そのものは自体が単独で存在できるものではない(浅田 1999: 229)」といえる。その限り、振り仮名は寄生

- 的・周辺的存在と見做される。
- 16) 振り仮名が相互参照を可能にする形式のひとつで、基本的機能が相互参照指示の中に共通性を理解するように強制するものであるとき、隠喩の機能と同じプロセスの認められることが指摘できる（隠喩については内山&杉本 2002を参照）。
- 17) 振り仮名に一定の教育効果があると説かれることは、アクセス権の制約に関係している。情報へのアクセス方法の制限は、組織内の力関係・秩序の維持と密接に結んでいる。但、島田（2002：173-174）は「現代の学生は…授業で『知識や技能』を獲得しようとするのではなく、『情報』を収集しようとしている。…教師がトークとテキストと板書を使い、学生がノートと鉛筆を使うことを前提とした授業観は、いまやほころんでいる」と指摘している。「知識蓄積型から情報消費型へ（中野 1986：227）」の情報形態の変化は以前から指摘される。情報へのランダムなアクセスの容易さが、〈先生が生徒に順序よく学ばせる〉という線形的学習観を変容させつつあるとき、振り仮名の教育効果を主張することが反動的なことに注意すべきだろう。
- 18) 破調は音数律を尊重する上で生じるものでそれを無視するのではない。規則を知らないものが規則に違反することはできない。
- 19) 加賀野井（1999：133-139）は、漢字仮名交じり文を中心とする書記体系の中で漢語の「視覚的な存在感」に慣れた日本人には「記号操作」に終始して「自分の目で物を見ない」傾向があると述べている。但、識字とは、現実が可視的に外部存在するという意識を生みだすものであろう。
- 20) 現実に、文字コードに指定された特定の「文字」が、絵画的に取り扱われることも珍しくない。
- 21) あわせてコロミーナ（1996：32-38）も参照。
- 22) 触覚性の不在は、振り仮名研究が、特段「肉筆的特質」に言及しないことによっても示唆される。活字の用語「ルビ」が振り仮名の全体を覆って用いられることも無関係ではないだろう。
- 23) さらに、視聴自体を拒否するかもしれない。「番組がつまらないとすぐにチャンネルを切り替える」ことが「よくある」人が約6割、「時々ある」をあわせると約9割になるとする調査（三上2000：146）がある。この「チャンネル切り替え行動」は、小中高校生についてもほぼ同様の調査結果が報告されている（白石 2000：34）。
- 24) サイドスーパーは常に、速報スーパーは即時に、出来事を繰り返す。
- 25) この点に関して、拙論（2002b）では、シミュレー

ションとしての近代口語体と、エミュレーションとしての現代口語体との関係を考察した。

- 26) そのため、テロップはそれ自身に似てくる。坂本（2000）は、60分間のニュース映像に現れた285のテロップは、「異なった放送局のニュースでも同じシーンタイプでのテロップの特徴は似ており、文字の大きさや位置によってある程度分類できる」としている。
- 27) 例えば、マジシャンや「超能力者」が〈テレパシー〉で使うゼロによるコード化をいう。
- 28) 電子メディアの特徴は「超平面的（東 2001）」なことだが、全面的に可視的であるという意味では表面でもある。表面に現れないものが存在しようとするれば、ゼロとして現れなければならないだろう。
- 29) 効率的なテクノロジーが非効率的な表記と結託していることは、言語の改良より技術の改良が好まれることを明確にする。テレックスが唯一の文字通信手段だったとき、カタカナを使用することに合わせた新たな表記・表現が必要と説かれた（例えば、山田 1969：263は「読みにくいカタカナを、読みやすいカタカナにしたなら、テレタイプ・テレックス文章は、日本列島の陸海空をウナリをたてて飛びかうに違いない」と書いている）。しかし、表現を技術にあわせるのではなく、表現にあった技術が選ばれ、FAX や電子メールを前にテレックスは2002年9月末をもって廃止される。



【参考文献】

- 浅田健太朗 1997 『「ルビ」の発生と展開に関する研究』広島大学修士論文。
- _____ 1999 『「あゝびき」における振仮名表現』、『日本語表現法論攷』217-229 溪水社。
- 東浩紀 2001 『動物化するポストモダン』講談社。

- 阿辻哲次 1991 『知的生産の文化史』丸善。
- 新井克弥 1995 「電子メディアによる『書くこと』の変容」, 『マス・コミュニケーション研究』47, 153-167.
- 五十嵐力 1922 『修辞学大要』斯文書院。
- 泉文明 1993 「二重表記の現在—短歌・俳句の表記の調査—」, 『日本語学』12(3), 95-104 明治書院。
- 岩淵匡 1988 「振り仮名の役割」, 『講座日本語と日本語教育』9 日本語の文字・表記(下)』58-86 明治書院。
- 内山和也 1996 「文体試論」広島大学卒業論文。
- _____ 1999 「振り仮名の12の機能とその分化」, 『日本語表現法論叢』230-241 溪水社。
- _____ 1999 「共感覚の文体—視覚的表現に関する日本語文体論の基礎的研究」広島大学修士論文。
- _____ 2002 「書体と文体」, 『広島大学大学院教育学研究科紀要第2部』50号, 225-233。
- _____ 2002 「現代口語体の表現スタイルについて」, 『広島大学日本語教育研究』第12号, 83-90。
- 内山和也・杉本巧 2002 「隠喩が意味を失うとき」, 『広島大学日本語教育研究』第12号, 75-82。
- 大島中正 1989 「表記主体の表記目的から見た漢字仮名並列表記形式」, 『同志社女子大学学術研究年報』第40巻IV, 60-74。
- _____ 1991 「語の漢字仮名並列表記は有用か—語彙教育とのかかわりにおいて—」, 『同志社女子大学日本語日本文学』第3号, 19-33。
- 小野瀬雅人 1999 『ふりがなの教育心理学的研究』野間教育研究所紀要第41集 野間教育研究所。
- 加賀野井秀一 1999 『日本語の復権』講談社。
- 鹿島英一 1992 「文字言語のソフトウェア」, 『東北大学言語論集』第1号, 71-87。
- 木坂基 1976 『近代文章の成立に関する基礎的研究』風間書房。
- 京極興一 1981 「振り仮名表記について」, 『信州大学教育学部紀要』第44号, 222-210。
- 小林芳規 1977 「表記法の変遷」, 林大他編『現代作文講座6 文字と表記』211-286 明治書院。
- 西条美紀 1999 『談話におけるメタ言語の役割』風間書房。
- 坂井利之 1968 『電子計算機』岩波書店。
- 坂部恵 1989 『鏡の中の日本語』筑摩書房。
- 坂本健一 2000 「ニュース映像からのテロップ出現検出と領域抽出に関する研究」神戸商船大学大学院修士論文。
- 塩田英子 2001 「文字テロップと推論モデル」, 『表現研究』74号, 47-56。
- 島田博司 2002 『メール私語の登場—大学授業の生誌3—』 玉川大学出版部。
- 白石信子 2000 「小・中・高校生のメディアライフの変容」, 『情報革命の光と影』27-36 カルチュラルエコロジー研究委員会。
- 進藤咲子 1982 「ふりがなの機能と変遷」, 『講座日本語学』6 現代表記との史的対照』228-254 明治書院。
- 高島俊男 2002 「短歌のふりがな雑感」, 『短歌研究』59(2), 30-33 短歌研究社。
- 武部良明 1979 『日本語の表記』角川書店。
- 玉井喜代志 1932 「振仮名の研究(上)」, 『国語と国文学』第9巻第5号, 74-82。
- 永田良太 2000 「接続詞カラの用法間の関係について」, 『日本語教育』107号, 36-44。
- 中野収 1986 『メディアと人間』有信堂。
- 永原康史 2002 『日本語のデザイン』美術出版社。
- 細川英雄 1989 「振り仮名—近代を中心に—」, 『漢字講座4 漢字と仮名』201-224 明治書院。
- 三上俊治 2000 「メディアの利用実態」, 『情報革命の光と影』143-157 カルチュラルエコロジー研究委員会。
- 森健一・八木橋利昭 1989 『日本語ワープロの誕生』丸善。
- 山城むつみ 1993 「漢文訓読について」, 『批評空間』第11号 福村出版。
- _____ 1999 「ルビと漢字」, 『Inter Communication』No.27, 63-67 NTT出版。
- 山田本生 1969 「テレタイプ・テレックスの文章」, 平井編『文章表現ハンドブック』223-236 至文堂。
- 由良君美 1973 「日本語の修辭力」, 『言語』2(1), 11-18 大修館書店。
- _____ 1973 「ルビの美学(上)」, 『言語』2(7), 28-37 大修館書店。
- アンガー, マーシャル 2001 『占領下日本の表記改革』奥村訳 [1996] 三元社。
- ウィーナー, ノーバート 1965 『科学と神 サイバネティックスと宗教』鎮目訳 [1964] みすず書房。
- コロミーナ, ピアトリス 1996 『マスメディアとしての近代建築』松畑強訳 [1994] 鹿島出版会。
- コンドラートフ, アレクサンドル 1979 『文字学の現在』磯谷・石井訳 [1975] 勁草書房。
- ソシュール, フェルディナン 1972 『一般言語学講義』小林英夫訳 [1949] 岩波書店。
- デリダ, ジャック 1978 『根源の彼方に グラマトロジーについて』足立和浩訳 [1967] 現代思潮社。
- バルト, ロラン 1977 『テキストの快楽』沢崎訳

振り仮名表現の諸相

- [1973] みすず書房.
_____ 2000 [1987] 『言語のざわめき』花輪訳
[1984] みすず書房.
フィッシャー, スティーヴン 2001 『ことばの歴史』
鈴木訳 [1999] 研究社.
フーコー, ミシェル 1986 『これはパイプではない』
豊崎・清水訳 [1973] 哲学書房.
ボードリヤール, ジャン 1988 『アメリカ 砂漠よ
永遠に』田中訳 [1986] 法政大学出版局.
マクルーハン, マーシャル 1987 『メディア論 人間
の拡張の諸相』栗原・河本訳 [1964] みすず書房.
モリス, チャールズ 1960 『記号と言語と行動』寮
金吉訳 [1946] 三省堂.
Becker, Joseph. D. 1984 "Multilingual Word Process-
ing" *Scientific American* (Intl.ed.), 251(1), 82-93.
Clark, Herbert. H. and Fox Tree, Jean. E. 2002 "Using
uh and *um* in spontaneous speaking", *COGNITION*
vol.84, 73-111.

(主任指導教官 町 博光)